

教員おすすめ図書コーナー推薦書

教員氏名	
熊澤 利和 先生	おすすめメッセージ
<p>① 図書名：ヘレナ・チャプコヴァー 阿部賢一訳（2021）『ベドジフ・フォイエルシュタインと日本』成文社</p> <p>著者：ヘレナ・チャプコヴァー 阿部賢一訳</p> <p>出版社：成文社 ISBN： <u>9784865200539</u></p>	<p>訳者あとがきより、「本書が、とりわけ日本の読者にとって意義深いものとなっている次なる点は、日本における中欧出身の建築家の系譜を明らかにしたことだろう。」「中欧出身の建築家のネットワークに光を当てた功績は極めて大きい。」とあります。</p> <p>ベドジフ・フォイエルシュタインは、アントニン・レーモンドからオファーを受け、日本で設計の仕事に関わるようになった。知っている建物として、聖路加国際病院がある。この設計にチェコ出身のアントニン・レーモンド、ヤン・J・シュヴァグルとともに担当をしています。</p> <p>アントニン・レーモンドは、高崎市の群馬音楽センターを設計しています。チェコの建築家と日本、高崎は、縁があります。アントニン・レーモンドに関する書籍も翻訳がすすめられているようです。また、紹介します。</p> <p>建築や美術を通して中欧と日本の交流の歴史をたどってみてはいかがでしょうか。</p>
<p>② 図書名：アンナ・ツィマ 阿部賢一/須藤輝彦訳（2021）『シブヤで目覚めて』河出書房新社</p> <p>著者：アンナ・ツィマ 阿部賢一/須藤輝彦訳</p> <p>出版社：河出書房新社 ISBN： <u>9784309208268</u></p>	<p>現代は、Probuď í m se na Šibujiです。この書籍で、チェコ最大の文学賞であるマグネシア・リテラ新人賞を受賞しています。</p> <p>インタビュー記事や関連する雑誌を読むと、アンナ・ツィマさんは、カレル大学を卒業後、日本に留学されている才女です。大学に入ってから文学をしたいと考えようになったそうです。</p> <p>僕は、ツィマさんが、なぜ日本に興味をもったのか、日本で仕事をされて、若く気新進気鋭であるツィマさんに、日本人の生活がどのように映ったのか、知りたいと思いました。</p> <p>チェコ発、現代文学を、是非、手に取ってみてください。</p>
<p>③ 図書名：ミラン・クンデラ(1998) 千野栄一訳『存在の耐えられない軽さ』集英社文庫</p> <p>著者：ミラン・クンデラ(1998) 千野栄一訳</p> <p>出版社：集英社文庫 ISBN： <u>9784087603514</u></p>	<p>紹介をするに当たり、『笑いと忘却の書』と、どちらがよいのだろうかと考えたが、こちらの書籍を紹介することにしました。</p> <p>この書籍は、1984年に発表されています。発表は、フランスで行われています。「プラハの春」の時代の恋愛小説です。ある一定以上の年齢の人は、読んだことがなくともタイトルは知っていると思います。映画化されて、世界中で注目された作品です。</p> <p>ヤン・パラフ（Jan Palach）というチェコ映画で、チェコスロバキア社会が変わっていくなかで、人々が無関心、無気力になっていくことが描かれています。その映像をみて、社会が変わるということは、人々の意識が変わることが、社会を変えてしまうのだと思いました。そして、なぜだか、今の日本に似ているところがあるなど、感じました。</p> <p>ミラン・クンデラは、1929年生まれです。1968年の「プラハの春」の時は、39歳です。変わっていく人々の心が、文学にどう影響するのか、興味があります。</p> <p>ちなみに、ヤン・パラフは、1969年、大学生の時に、旧ソ連の侵攻に対する抗議として焼身自殺しました。</p> <p>もし興味を持っていただければ、うれしいです。</p>